



Nagoya University Library



名古屋大学附属図書館所蔵 神宮皇学館文庫
「伊勢物語抄」
10060216 2/183

わすしとらう侍の使の跡とてうら
けりか其の事也
伴行^カ下^カ為^カ也 伊勢の事也
也 終書の系也 建礼の院ノ系也
の又ノりヤははらるや

奥書の後ぞと也 年をえ

業年一即し 源朝一也 故

可^カ伊勢^カ年^カと^カて^カ他^カの

作^カの^カも^カん^カえ^カの^カ奥

書の心し

源氏物語の事

源氏授衣^カ寫^カ言^カして^カあ^カこ

事^カと^カわ^カら^カる^カと^カい^カは^カる^カ

事^カと^カら^カう^カて^カの^カさ^カえ^カと^カい^カり

不^カも^カ也^カゆ^カて^カん^カん^カや^カら^カは

ら^カひ^カて^カら^カう^カの^カ影^カ也

知^カ取^カ集^カと^カて^カは^カ物^カ法^カと^カい^カは^カる

他^カの^カ家^カの^カ先^カ知^カ取^カ集^カ

り^カと^カい^カは^カる^カの^カ心^カと^カい^カは^カる

実^カと^カい^カは^カる^カ也^カ一^カ条^カ大^カ同

之^カ用^カと^カい^カは^カる^カ知^カ取^カと^カい^カは^カる

見^カ抄^カと^カて^カ被^カ治^カと^カい^カは^カる

中^カ物^カ安^カ紙^カら^カう^カの^カ同^カ書^カ由

源^カ則^カ有^カる^カ也^カ 程^カ能^カ書^カ社^カ流

及^カ以^カ之^カ抄^カと^カい^カは^カる^カ事^カ小^カ抄

三つとて云義也常し
 木の事しじし常し月
 てよま古江の流しゆた
 故也男、董平也
 董平秘傳董平の義義性性は
 ともかくよ本又わきこ
 人つりよまをよかひら
 一階の初し常しとて
 ちし
 うわさうして文脈の二
 字よし丹やありしし也

漢書漢書の序
 董平董平の義義性性は
 ともかくよ本又わきこ
 人つりよまをよかひら
 一階の初し常しとて
 ちし
 うわさうして文脈の二
 字よし丹やありしし也

一ひのひくもくもくし
 美敷りか一色に海に
 五の夜のみ 光を望
 の事なくもあふもろく
 方也を望むとやいふも
 らふもくもくもくもく
 と見ふ柳の文のなほ
 ていなり
 とうし句がはみちあふ
 こましくつめの方つち
 らるくもくもくもくもく

一ひのひくもくもくし
 美敷りか一色に海に
 五の夜のみ 光を望
 の事なくもあふもろく
 方也を望むとやいふも
 らふもくもくもくもく
 と見ふ柳の文のなほ
 ていなり
 とうし句がはみちあふ
 こましくつめの方つち
 らるくもくもくもくもく

ありての芳 とき支序方也融
 への他定に惟ゆのよりを
 之わたりたかふことされしか
 其れをわきましありて女の
 用之りんことよこのまは
 務めのなれりあし惟
 の氣りりまんと也まらるの
 出りしやいふの心と用之り
 書り也 **毛**侍りしは
 こり方の心も也 双身也
 方他意用之りまると也

ありての 早也幸と也
 志り也

じいびとねそ伊勢の洞く
あつこいし
みつりたも也

みやび 情とらほん也嫁ま

のん道也 風姿 リ

河原たぐはれ也 たぐはれは源實盛年
七の月薨ス七十三

於在中将非 イ 先達 ハ 行

是定家勳の約 ハ

の光 ハ ありて ハ 融

方と幸平 ハ 幸平 ハ 先

運つぬは只女の世なりとある
 不中へ又も河村のつらき
 舟の別れなり

若男をとりむの京のり
 桓美のち長房をききあみの
 京離を先長世に都して
 ちてはくちの平太左のち東の
 次也と東東とわくはひりて
 ちて人の家やるとはひりて
 と子もあくるにひりて
 ちのあつたをくるにひりて

ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた
 ちのあつた ちのあつた

人ゆくりわちあつと
津らふあひ也

海のかき 実と海めし
し美人とて月一葉草
白蛇の細いる勝りや
くもあつとあつと

あつとあつと 細いる勝り
あつとあつと 用とあつと
わつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと

万
川
可
也

あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと

急の奇に海は九骨りと
 持て業平小成ては方と名也
 三
 ひく男ありくくうとまはは
 女のみふ 空らうに無相と
 女はあひまらるの似也末
 は安家伝はしてしあつて
 二條治とあそむる業平公
 巻の好父とあそむ也
 三
 何事也ふとて
 つくはく一やちかひは
 ぬいしきつてス方の伝は

急の奇に海は九骨りと
 思ふはあつてはつての
 福あつてはつてはつて
 一
 玉一もの家にあそむる
 女はあひまらるの似也末
 は安家伝はしてしあつて
 あそむるはつてはつて
 宿社と作なしてはつて
 里あつてはつてはつて

志んふ万葉に **伊勢入**よの
 看しよき事 **伊勢**入らん事 **伊勢**
 するを秘めしよ事 **伊勢**の地也
 薄の宿し **伊勢**の宿 **伊勢**入
 知らず **伊勢**の宿 **伊勢**入 **伊勢**入
 推 **伊勢**入 **伊勢**入 **伊勢**入
 抄也 **伊勢**入 **伊勢**入 **伊勢**入
 能 **伊勢**入 **伊勢**入 **伊勢**入
 東 **伊勢**入 **伊勢**入 **伊勢**入
 始 **伊勢**入 **伊勢**入 **伊勢**入
 と **伊勢**入 **伊勢**入 **伊勢**入
 人 **伊勢**入 **伊勢**入 **伊勢**入

志んふ **伊勢**入 **伊勢**入
 看しよき事 **伊勢**入
 するを秘めしよ事 **伊勢**入
 薄の宿し **伊勢**入
 知らず **伊勢**入
 推 **伊勢**入
 抄也 **伊勢**入
 能 **伊勢**入
 東 **伊勢**入
 始 **伊勢**入
 と **伊勢**入
 人 **伊勢**入

柳葉平と云うてそとを
 おつちの時と云うてそとを
 今そつちの時と云うて
 そとを昔の舞妓と云うて
 在業の時也入内と云うて
 めんじと云うてそとを
 若菜の世業 東京の上陸
 此の世業の世業は名
 正業也世業の名と云うて
 世業の名と云うてそとを
 忠仁との世業と云うて

あのもふと云うてそとを
 位高る所の世業と云うて
 世業の名と云うて
 おつちの時と云うて
 今そつちの時と云うて
 そとを昔の舞妓と云うて
 在業の時也入内と云うて
 めんじと云うてそとを
 若菜の世業 東京の上陸
 此の世業の世業は名
 正業也世業の名と云うて
 世業の名と云うてそとを
 忠仁との世業と云うて

ひとよとてなるほどしとてあま
 くのゝあまふらうとてあま
 哉とてあまの流と用らる環
 翠のりい反のあまふらう
 ちまふらうとてあまふらう
 りまふらうとてあまふらう
 一まふらうとてあまふらう
 知らるらうとてあまふらう
 ひとよとてあまふらうとて
 又のまふらうのあまふらう
 まふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

ねとてあまふらうとてあまふらう

の心はちかやほほの影やえ
まをりり見のま也

わろくはるきまもく 必わき

ゆきまをくの人や 家いもき

いりあつしえあつしる音のま

月わわらう 葉平方うま

ていさ信道のの秀逸にけり

わらわら月あつ月をま

ぬままじりしものまうまあさ

くまふまきまうまあ

くまふまきまうまあ

まうまきまうまあ

月あつ月をま

ぬままじりしものまうまあ

くまふまきまうまあ

月あつ月をま

ぬままじりしものまうまあ

くまふまきまうまあ

月あつ月をま

ぬままじりしものまうまあ

くまふまきまうまあ

月あつ月をま

既致力ひつらひつらと
 持てたふしし 秘蔵
 佐成心ちすすとさるる日や
 わねまわしじし又 結すの
 滴しあうらと井のわくても
 人しあわらふしあそむと中
 ちるしき 秘蔵
 の音ふらうらふらふら
 右のふらとそふのふらふ
 平のふらふらふらふら
 けいふらふらふらふら

了しし 秘蔵 廿二ふらふら
 ちるしき

夫のふらふらふらふら
 ちるしきふらふらふらふら
 中て居てふらふらふらふら
 ちるしき 秘蔵 又 既名と重
 ちるしき 夫らふらふらふら
 ちるしき ちるしきふらふらふら
 既名と又ふらふらふらふら
 ちるしきふらふらふらふら

若男わらふらふらふら 秘蔵

日ありてはあはれ
 みそふ 密ノ字深卷ノ如
 けはら けしつらふとつら
 今ノ道一とわぬこと思
 りん也い物結の何何
 古今ノもといふ所と書
 入りては古今ノ恒の
 きてわらふそ又昔の筆
 奇特ノこととていふ所
 書きかつていふ所
 ついで目とていふ所

わらわ

わらわ 深卷ノ如也
 今ノ道一とわぬこと思
 りん也い物結の何何
 古今ノもといふ所と書
 入りては古今ノ恒の
 きてわらふそ又昔の筆
 奇特ノこととていふ所
 書きかつていふ所
 ついで目とていふ所

二条のうき業との似て

余の信のは見や匠國總を

作

若男まひりし母のまゝ海

けり 信はまゝに二条後

からして 幸かしくは

しとまゝに

わくまひりし母のまゝ海

有るをわくまひりし母

海をく非格別なる格別

なるものわくまひりし母

けり 作功法のおまゝ

筋の格別なる格別

はつての格別なる格別

に將軍さく書しを

あつて 右大明書裁す

羊のうき業との似て

まゝに 若名さく書し

しとまゝに 筋の格別

しとまゝに

わくまひりし母のまゝ

業まひりし母のまゝ

わが御つゝよくは御座り
 と書てやうな御女子
 と付りおぼへては家
 うしわら

男うはれらひとては
 目う茶と帯して 雷鳴
 陣し作られ、兼年しと
 入兼年うけたを備成
 常の宿い也
 大なる心とて、命を
 けり、舟にのりて、いふ

入兼年うけたを備成
 女がもまの心とて、命を
 とし、舟にのりて、いふ

わが御つゝよくは御座り
 と書てやうな御女子
 と付りおぼへては家
 うしわら

陀
 長。とて、とて、とて、とて、
 家うしわら、とて、とて、
 土佐と、流石と、とて、補陀と、
 海舟と、才女と、御座り、とて、

浅井のうゑとあはれをかくはるは
 世にあはれをまじり柳の世
 なるを 杖尻のゆきよとる
 白帯のたをわねの流るるは
 いまのうゑとあはれは 白帯は
 みのうゑとあはれを 喜傷の
 部へ入るよとあはれ鬼のうゑ
 しまあはれ

その二葉の後のふりつぼり
 つきつぼりの 浅井の名は
 けしつぼり名をうゑとあはれ

へつぼりとあはれをかくはるは
 ひろのうゑとあはれ 義抄 又入選
 貞女是来其思密 ヒロカ
 出づるはつとあはれ 子のうゑ
 うゑとあはれ 時勢をまじ
 ち物とあはれ 然りて
 浅井のうゑとあはれ 世と
 なるを 世とあはれ 世とあはれ
 一死とあはれ 世とあはれ
 久しうとあはれ 世とあはれ

中つらぬ さまの 名嗣一男

と云はる方と云はる身と云はる

の言はれぬ三條の右良左衛門

五郎の湯方の後つと云はる

二条右衛門尉の先湯方の

佐のさまの御つと云はる

つと云はるつと云はるつと云はる

い細き
右良書 三條右衛門尉の始ノ仁明

その 文治五年の御時三條右衛門尉

と云 後明の御時三條右衛門尉

つと云はる 三條右衛門尉

三條の御つと云はる

右良左衛門尉の御つと云はる

と云はる御つと云はる

と云はる御つと云はる

と云はる御つと云はる

と云はる御つと云はる

と云はる御つと云はる

と云はる御つと云はる

と云はる御つと云はる

と云はる御つと云はる

と云はる御つと云はる

ぬきしきふわくうらな
 活の打をてふうらな
 紙をひ活のぬくうらな
 しわりのわくうらな
 知れりるわくうらな
 則ちして片あまの味を
 べしとせ

八
 あしきく人あしきく後るんま
 あしきく人あしきく後るんま
 花の原の田村うらな

七
 ちのうらな 書年拾中巻

一もつしきふわくうらな
 活の打をてふうらな
 紙をひ活のぬくうらな
 しわりのわくうらな
 知れりるわくうらな
 則ちして片あまの味を
 べしとせ

のほろほろと情はこころのち
 そと前の暗いさしあし
 とて移りゆくは心も移り
 多し川のくさ 名の振替へ
 けりまはさるるのちのち
 かわる物くさしきくす
 けりまはさるるのちのち
 さしあし
 中し用はさるるのちのち
 物くさしきくす
 あらゆるこ

今片の煙のちりやまのち
 今もさるるのちのち
 すのちをさるるのちのち
 ん御さるるのちのち
 今片の煙のちりやまのち
 今もさるるのちのち
 すのちをさるるのちのち
 ん御さるるのちのち
 今片の煙のちりやまのち
 今もさるるのちのち
 すのちをさるるのちのち
 ん御さるるのちのち

不也ふらう 不也わらう
 とあつ 望ん家の海の道い也
 ちん 一石く のたのふらう
 中をわらう くらふらう
 唯清うら 果のふらう
 ちん 一石く のたのふらう
 母をわらう くらふらう
 思ふ 一石く のたのふらう
 ちん 一石く のたのふらう
 ちん 一石く のたのふらう

おの清うら くらふらう
 霧中へ くらふらう
 ちん 一石く のたのふらう
 ちん 一石く のたのふらう
 ちん 一石く のたのふらう
 ちん 一石く のたのふらう
 ちん 一石く のたのふらう
 ちん 一石く のたのふらう
 ちん 一石く のたのふらう
 ちん 一石く のたのふらう

此の所のてははかぬのり
 方と感懐はけはくうら
 手ははかぬにびとま也
 けさしてすらの奥にあら
 そし一版とてあはれま
 孝のしとさあむとあそ
 考つていふなり 兼一なり
 とふし説は具の事しき
 新冠本、上なりとてまの
 ちみま也
 すら 幸の事也 生家は

死也 ^{五教} 是なり 流死又
 辛若くしてさあはるる也
 葉介のい也 ^難 難にわ
 泡に宿りてすらの秘の
 ずらひ ^{後集} ぞとて世をば ^{おも}
 すの者 備ふんとて
 よのの ^い ことあり
 みるそは ^い けさして
 くら便ふ ^い けさして
 すら ^い けさして 上句に
 うら ^い けさして けさして

事の中くもめてもどく人
 一わあましし一脱操の
 くらゝもた多ししはなま
 らりたしうやうしと
 けめ方古り及て常の
 わりたて時早もまあ
 ぶの録しむらわて文
 白らたまてけしつと
 への常もまんと也あ
 くれけのちるる
 こといししけ細い事そい

塔の江 菅平俊 ころめく
 とていしあふ

たるら 廿也
 志のより 也 植原全

極しつわありそ風信い
 流く智故ぬ早河常
 沖信用也況試かろう
 却の先人命推後植
 九早くも用之なるそ
 多し性事有ぬ四人
 菅平俊 中 ころめく

儀理の事は計事也下
 志は^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし
 志^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし
 志^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし
 志^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし
 志^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし

乃ち^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし
 志^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし
 志^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし
 志^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし
 志^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし
 志^ウあさ 侍^ウあさ
 へはれりすすてし

相成せしと云ふの辺部
云々相成する多あり
し思ふに昔よりありたりや
みやと心ささくは活命
のくんとわたりたりは
てんて也

母を愛してわたりたり
こころよあはれは部公の
てん世奉るいふのん
父で一人又げい女と一人
わたりたりと母を奉る

とせり

わたりたり今も勝り今も
のん奉るなりとて
あはれなりとて 五人也わたり
この平なりとて 倍姓なり
あはれなりとて 麻人人心
母を母に愛わりたり
今もひいなりとて 源平
者橋に姓なりとて 平氏
はあはれなりとて 中光
とて 平氏なりとて 源平の

お氏列の巻紙へ
正徳二年
六月廿三日

二條の御書 津の家へ申す也

ひこく様より云々 昔年より云々

智恵量と云々 湯氏へ

名子より云々 紅葉の巻紙

お氏様の方へ 申すに

昔相通の如く 申すに

一方に云々 申すに

申すに 申すに

申すに 申すに

と書し 申すに

通の如く 申すに

お氏様の方へ 申すに

申すに 申すに

申すに 申すに

申すに 申すに

申すに 申すに

申すに 申すに

申すに 申すに

申すに 申すに

申すに 申すに

烏丸の... 月... の... の...
 後... 平... 末... 直幹...
 拾遺才... 八... の... の... の...
 上... の... の... の... の...
 取... の... の... の... の...
 以... の... の... の... の...
 い... の... の... の... の...
 昔... の... の... の... の...
 友... の... の... の... の...
 と... の... の... の... の...
 論... の... の... の... の...

三

人... の... の... の... の...
 未... の... の... の... の...
 相... の... の... の... の...
 と... の... の... の... の...
 物... の... の... の... の...
 と... の... の... の... の...
 相... の... の... の... の...
 未... の... の... の... の...
 人... の... の... の... の...

飛越後へ

くふのうらむしむめれふらり
物とたひにけし書んてし
飛越後の原をぬれぬ也

みらるる人 海東へ飛道ま
ひきけり方 古今にまき部
入る也 且女字のけしむ
且女字のけしむて入る人
草のけしむのけしむて入る人
古今に飛越後の原をぬれぬ也
は男のけしむのけしむて入る人

あはれとてはかたわらふと

あそぶなり 又けしむて入る人
まのけしむて入る人 業平とて
まのけしむて入る人 業平とて
まのけしむて入る人 業平とて
あそぶなり也

あそぶなり也
あそぶなり也
あそぶなり也
あそぶなり也
あそぶなり也
あそぶなり也
あそぶなり也
あそぶなり也
あそぶなり也
あそぶなり也

しつちりしつちりわらわら
ふらふらふらふらふらふら
ふらふらふらふらふらふら

の

しつちりしつちりわらわら

ふらふらふらふらふらふら

しつちりしつちりわらわら

ふらふらふらふらふらふら

しつちりしつちりわらわら

しつちりしつちりわらわら

ふらふらふらふらふらふら

しつちりしつちりわらわら

しつちりしつちりわらわら

ふらふらふらふらふらふら

しつちりしつちりわらわら

ふらふらふらふらふらふら

しつちりしつちりわらわら

ふらふらふらふらふらふら

しつちりしつちりわらわら

ふらふらふらふらふらふら

しつちりしつちりわらわら

ふらふらふらふらふらふら

しつちりしつちりわらわら

方中をいひ申すは、
其の如く、
海に流る

舟の如く、
此の如く、
又、
定家、
と云け、
おつと也、

軍中、
万、
新、
と云け、
小、
は、
と云、

しものも細少の心（私統一版）
御上（御上）の心（御上）を御心（御心）

4つづのちねの留りて

ふらふれ中てしつらふれ

ねのまを思ふると女は秋津と

思ふにけしむ墨家（墨家）はなはだ

言はれあつて秋津と

ふらふれの中へ林の津と

ふらふれといふ御心とけし方のとる

とふらふれ（御心）ふらふれ（御心）

用はまゝ（御心）わひく（御心）とあはれまゝと

一統わきまのねにふらふれ

御心（御心）ふらふれ（御心）

いん物を（御心）と御心（御心）

ふらふれと御心（御心）

ふらふれと御心（御心）

ふらふれと御心（御心）

ふらふれと御心（御心）

ふらふれと御心（御心）

ふらふれと御心（御心）

ふらふれと御心（御心）

ふらふれと御心（御心）

しるしにぬきしは行幸事か
 たりとてかき置るべきこと
 へし相成りしはかき置るべし
 細入御史もなほかき置るべし
 ありしことかき置るべし
 少将とかき置るべし
 判の細しに相成りしはかき置るべし
 わりきりしはかき置るべし
 果つてかき置るべし
 果つてかき置るべし

是の事人の胸中より出づ

人の心と云ふ事と見せ
 是れ今御史もかき置るべし
 へし相成りしはかき置るべし
 ありしことかき置るべし
 少将とかき置るべし
 判の細しに相成りしはかき置るべし
 わりきりしはかき置るべし
 果つてかき置るべし
 果つてかき置るべし

してとてはつゝもあつて
 大なる御徳をあらはせ
 されのあらはれり 名属す
 みるのまゝに 淳仁の文徳
 の三代とばへり也
 何れあはれを 右の代と
 してはあはれを法に五位
 つをまひてとる 紀氏に
 ありたりとたふ地ちつは
 齋親王の御名属す 静子
 の版入を幸ふ石虎とる



惟喬の伯父に惟喬惟仁
 位ありしはあまのまこと
 りの中けつとて法に信
 りのまゝに 紀氏にあらは
 りのまゝに 淳仁の文徳
 ありとてはつゝもあつて
 大なる御徳をあらはせ
 されのあらはれり 名属す
 みるのまゝに 淳仁の文徳
 の三代とばへり也
 何れあはれを 右の代と
 してはあはれを法に五位
 つをまひてとる 紀氏に
 ありたりとたふ地ちつは
 齋親王の御名属す 静子
 の版入を幸ふ石虎とる

後しつゝのりつゝのり
 せまゝ家とてかゝりつゝ
 のりつゝのりつゝのり
 くのりつゝのりつゝのり
 世務とてかゝりつゝ
 床だましくまぬ目床めて
 けんとさる事あひつゝ
 ちよあつゝのりつゝのり
 が右のりつゝのりつゝのり
 直陰泥るつゝのりつゝのり
 常とさるゝつゝのりつゝのり

ままこのりつゝのりつゝのり
 家とてかゝりつゝのりつゝのり
 のりつゝのりつゝのりつゝのり
 後の方とてかゝりつゝのりつゝのり
 のりつゝのりつゝのりつゝのり
 の後五尺村とてかゝりつゝのりつゝのり
 推法村とてかゝりつゝのりつゝのり
 のりつゝのりつゝのりつゝのり
 うつゝのりつゝのりつゝのり
 供養のりつゝのりつゝのり
 のりつゝのりつゝのり

わくわくしつゝしつゝしつゝしつゝ
事ありしつゝしつゝしつゝしつゝ
いかにいかにいかにいかに
はははははははははははは
わくの先づしつゝしつゝしつゝ
姉原を任ふしつゝしつゝしつゝ
成くしつゝしつゝしつゝしつゝ

男浦ふしつゝしつゝしつゝしつゝ
はははははははははははは
のいせ既世しつゝしつゝしつゝ

あつあつしつゝしつゝしつゝしつゝ
いかにいかにいかにいかに
すつすつしつゝしつゝしつゝしつゝ
いかにいかにいかにいかに
本ら 業年
あつあつしつゝしつゝしつゝしつゝ
中はははははははははははは
あつあつしつゝしつゝしつゝしつゝ
中を業年しつゝしつゝしつゝしつゝ
あつあつしつゝしつゝしつゝしつゝ
又業年しつゝしつゝしつゝしつゝ

年あつとすいひのくまの
くふ用くをひくと一洗
三平一也

ふのあつと 上の二平と業

平後と送しれふいなり

年あつと書せもひけり

ふあり平と別しせと立

つらひの中さしと也

あつとふのち 幸平候と

ふしてあつとく自白自告

のちく先とて夫人の明家

あつとてちわいひ天子の

ゆ家同くふひて業平一平

ふん衣あつと也むい字

けしこのく 尚衣（平）の隆平

衣（衣）衣（衣）衣（衣）衣（衣）衣（衣）

おてとて天子の衣入みけ

御衣も 上衣と書り日記

衣家の字のせあり

ふらふらふら又一首とるん

この能述とるんおとふん

まのふ衣とあつとあつ

心程のうらみの程とて是
 状やうる方 状人のいりかた
 此の世言に好ましく露のる
 露神しく思くを平年志
 ちる感涙とてまけるりし
 白で泪のぬくつらうる
 事此とてまらける 心程
 心程やて若のまのまか
 うめりし人平年志の
 ことりせふらん名のこと
 心程

心程のうらみの程とて是
 状やうる方 状人のいりかた
 此の世言に好ましく露のる
 露神しく思くを平年志
 ちる感涙とてまけるりし
 白で泪のぬくつらうる
 事此とてまらける 心程
 心程やて若のまのまか
 うめりし人平年志の
 ことりせふらん名のこと
 心程

新しきくさの芽らね
りし秋の風をたてし也

大
あはれなる 中世の 新しき 秋の風

水世風熟しとらし久留の

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也
あはれなる 秋の風をたてし也
あはれなる 秋の風をたてし也
あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也
あはれなる 秋の風をたてし也
あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

あはれなる 秋の風をたてし也

一、
 日書也
 志はふみける 葦年の
 心とらてふし
 紅白の芳 紅白の華
 かけの神
 物も動も花のうさ
 中しふてまの
 志はふみける 葦年の
 心とらてふし
 紅白の芳 紅白の華
 かけの神
 物も動も花のうさ
 中しふてまの

夫
 まるくしけ女の 葦年
 の志はふみける 葦年の
 心とらてふし
 紅白の芳 紅白の華
 かけの神
 物も動も花のうさ
 中しふてまの
 志はふみける 葦年の
 心とらてふし
 紅白の芳 紅白の華
 かけの神
 物も動も花のうさ
 中しふてまの

大
 尾中へおあつたおのき
 文つらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた

へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた
 へつらひの書年とあつた

中より...の...
 中の中...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

中々女はのほほえみ月日と
 ついでに親会し書年慈
 情の世ありふらうしおの
 のいせのてま一様一書
 事もつまつんしふりも
 中々向うもあつてなひて
 するや一丸うし
 へいふちうちひひひひひ
 かしらわらわらと名
 かりかきふし女我ら
 りん里つたわんわん

とは仲いひの酒をなつて我
 せよつておれとらふは
 じつと女のあつた恩
 事かき外しふらう書
 万葉しむらう西行
 てあり **ふ**らん
 う揚り花の書らるま
 へあつたらんしひ
 大いんのいせりせら
 びらんふしんたて
 らん

かたはるに... 伊勢物語

秋の佳しや 獅の事ん

定家... 獅の事ん

ま... 獅の事ん

と... 獅の事ん

ま... 獅の事ん

福... 獅の事ん

好... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

兼平... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

と... 獅の事ん

おはつらふあつて事いひま
の及梅の心もふて是も以
てさういふ事いひあつて
勝つて

中世の女子の孤中世は
也事夫の事いひあつて
ゆり男の事いひあつて
事いひあつて也

と云ひあつて方いひあつて
る事先世とていひあつて
方いひあつての事いひあつて

世に女子の事いひあつて
唯ふ事いひあつて
友方の中世は事いひあつて
事いひあつて
事いひあつて也

事いひあつて
事いひあつて也

事いひあつて
事いひあつて
事いひあつて
事いひあつて
事いひあつて

1
 車に
 人めめらるるしんまけき母
 方の内しんせらるしん田原
 しわの事しんせらる
 あんしんせらる 養年しん
 心せ我しんせらるしんせが
 せらるしんせ
 車んせらるしん せらるしん
 せらるしんせらるしんせらる
 せらるしんせらるしんせらる
 せらるしんせらるしんせらる
 せらるしんせらるしんせらる

1
 車に
 人めめらるるしんまけき母
 方の内しんせらるしん田原
 しわの事しんせらる
 あんしんせらる 養年しん
 心せ我しんせらるしんせが
 せらるしんせ
 車んせらるしん せらるしん
 せらるしんせらるしんせらる
 せらるしんせらるしんせらる
 せらるしんせらるしんせらる
 せらるしんせらるしんせらる

秋の夜の方 秋の夜をいふ

あつたて一歩おひてふ光景

いあつていあつていあつて

秋の夜の方 とのうらみ

よあつたふらけりあつて一光景

いあつていあつていあつて

大 三
あつたていあつていあつて

いあつて

くのみこい 春年 又も春。

娘の貞女 けりしあつて

わつたて

あつたていあつていあつて

あつたていあつていあつて

あつたていあつていあつて

あつたていあつていあつて

あつたていあつていあつて

あつたていあつていあつて

あつたていあつていあつて

あつたていあつていあつて

あつたていあつていあつて

あつたていあつていあつて

ゑがたのふかき けをまきいそめ
 ときと果てたてぬのしほ
 わやわやの悦あり ちかおれ
 ぬゆきしほり 室家のつとむ
 ゆふりふきしほりあゝ ちかひ
 夫悦ふ事いづれ 未だふかぬ
 けしりふととれしほり 方たあむ
 くらりも地は川井いづれのしほ
 凡くとてさる井けしほ
 くらりふかぬ 女の悦あけしほ
 元服の心せしほり くらりしほ

吉女の悦ありし書りて 女男
 のわたりし事なんまねすま
 かのしほり ちかひのしほり
 女男の悦ありし書りて 女男
 又悦ありし事なんまねすま
 常法の悦ありし書りて 常法
 しほりしほりし書りて 常法
 吉女の悦ありし書りて 吉女
 又悦ありし事なんまねすま
 常法の悦ありし書りて 常法
 しほりしほりし書りて 常法

わさしとてきりし
まゝ難問のうへに
ふりかゝるもつひや

わさしとてきりし
えんてんや

しんふ本書の新編に
男父別吏上の別れ

思ふはてしなく
こゝろへていふ

いんもさし
相好也あやとけう

非独想女の男とりて
まを後するを
書くて終るといふ

いさのけり
毛詩
風起

夜中寝た女
けり

あやとて
ふりかゝる

さかすか
さかすか

保林白澤抄のついでに書也
 ぬい人のついでにけつる御い
 ぬい人のついでにけつる御い
 ぬい人のついでにけつる御い
 ぬい人のついでにけつる御い
 ぬい人のついでにけつる御い
 ぬい人のついでにけつる御い
 ぬい人のついでにけつる御い
 ぬい人のついでにけつる御い
 ぬい人のついでにけつる御い
 ぬい人のついでにけつる御い

可決書也

ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也

ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也
 ちあふて 初初のついでに書也

毛のわりと方（一）のたゞ直る所は
伊勢先きの所と思ふ

大和の国と下々なる方（二）は
耳の（三）のたゞ直る所は
宿りしと再しなる伊勢
下（四）宿 毛のわりと方（五）は
て直る所は伊勢の（六）しる
所（七）のたゞ直る所は
毛のわりと方（八）

伊勢の平 業平也
毛のわりと方（九）は又直る所は能

大

毛のわりと方（十）は直る所は
毛のわりと方（十一）は直る所は
のたゞ直る所は
毛のわりと方（十二）は直る所は
のたゞ直る所は

毛のわりと方（十三）は直る所は
毛のわりと方（十四）は直る所は
毛のわりと方（十五）は直る所は
毛のわりと方（十六）は直る所は
毛のわりと方（十七）は直る所は
毛のわりと方（十八）は直る所は
毛のわりと方（十九）は直る所は
毛のわりと方（二十）は直る所は
毛のわりと方（二十一）は直る所は
毛のわりと方（二十二）は直る所は
毛のわりと方（二十三）は直る所は
毛のわりと方（二十四）は直る所は
毛のわりと方（二十五）は直る所は
毛のわりと方（二十六）は直る所は
毛のわりと方（二十七）は直る所は
毛のわりと方（二十八）は直る所は
毛のわりと方（二十九）は直る所は
毛のわりと方（三十）は直る所は
毛のわりと方（三十一）は直る所は
毛のわりと方（三十二）は直る所は
毛のわりと方（三十三）は直る所は
毛のわりと方（三十四）は直る所は
毛のわりと方（三十五）は直る所は
毛のわりと方（三十六）は直る所は
毛のわりと方（三十七）は直る所は
毛のわりと方（三十八）は直る所は
毛のわりと方（三十九）は直る所は
毛のわりと方（四十）は直る所は
毛のわりと方（四十一）は直る所は
毛のわりと方（四十二）は直る所は
毛のわりと方（四十三）は直る所は
毛のわりと方（四十四）は直る所は
毛のわりと方（四十五）は直る所は
毛のわりと方（四十六）は直る所は
毛のわりと方（四十七）は直る所は
毛のわりと方（四十八）は直る所は
毛のわりと方（四十九）は直る所は
毛のわりと方（五十）は直る所は
毛のわりと方（五十一）は直る所は
毛のわりと方（五十二）は直る所は
毛のわりと方（五十三）は直る所は
毛のわりと方（五十四）は直る所は
毛のわりと方（五十五）は直る所は
毛のわりと方（五十六）は直る所は
毛のわりと方（五十七）は直る所は
毛のわりと方（五十八）は直る所は
毛のわりと方（五十九）は直る所は
毛のわりと方（六十）は直る所は
毛のわりと方（六十一）は直る所は
毛のわりと方（六十二）は直る所は
毛のわりと方（六十三）は直る所は
毛のわりと方（六十四）は直る所は
毛のわりと方（六十五）は直る所は
毛のわりと方（六十六）は直る所は
毛のわりと方（六十七）は直る所は
毛のわりと方（六十八）は直る所は
毛のわりと方（六十九）は直る所は
毛のわりと方（七十）は直る所は
毛のわりと方（七十一）は直る所は
毛のわりと方（七十二）は直る所は
毛のわりと方（七十三）は直る所は
毛のわりと方（七十四）は直る所は
毛のわりと方（七十五）は直る所は
毛のわりと方（七十六）は直る所は
毛のわりと方（七十七）は直る所は
毛のわりと方（七十八）は直る所は
毛のわりと方（七十九）は直る所は
毛のわりと方（八十）は直る所は
毛のわりと方（八十一）は直る所は
毛のわりと方（八十二）は直る所は
毛のわりと方（八十三）は直る所は
毛のわりと方（八十四）は直る所は
毛のわりと方（八十五）は直る所は
毛のわりと方（八十六）は直る所は
毛のわりと方（八十七）は直る所は
毛のわりと方（八十八）は直る所は
毛のわりと方（八十九）は直る所は
毛のわりと方（九十）は直る所は
毛のわりと方（九十一）は直る所は
毛のわりと方（九十二）は直る所は
毛のわりと方（九十三）は直る所は
毛のわりと方（九十四）は直る所は
毛のわりと方（九十五）は直る所は
毛のわりと方（九十六）は直る所は
毛のわりと方（九十七）は直る所は
毛のわりと方（九十八）は直る所は
毛のわりと方（九十九）は直る所は
毛のわりと方（一百）は直る所は

此七、故と云く、(松原)の(女名)
はわいありし、を(末)に(み)わらへり
し、(き)こりし(松原)の(女名)
ト、(き)こりし(松原)の(女名)
に、(き)こりし(松原)の(女名)
に、(き)こりし(松原)の(女名)

つとみ人時 別として録物也

。十、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

来て、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

あむまの、(松原)の(女名)

ふた、(松原)の(女名)

朝花の、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

あむまの、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

あけぐ、(松原)の(女名)

年々くちませりし山向御也
 けとまありたりわろ物もれ也若
 の折を細くさつりてめ遣也
 るりて色もさつりてめ遣也
 るりて色もさつりてめ遣也
 うはらの對もゆきとせり
 し色な吾と書也とせり
 友の親子兄弟と書ゆきとせり
 なるや右流紙色紙に也
 心海をい

持らひけりし書年いふり

かくいひてはたひあはれ
 なるも男のめりて也
 るりて色もさつりてめ遣也
 けとまありたりわろ物もれ也若
 の折を細くさつりてめ遣也
 るりて色もさつりてめ遣也
 うはらの對もゆきとせり
 し色な吾と書也とせり
 友の親子兄弟と書ゆきとせり
 なるや右流紙色紙に也
 心海をい

平賀のつれ 小指の血を也

こころの血を言ふ外より也

まろとまろの故に云々

まろとまろの御説也

あつたそつちの御説也

らうちの御説也

まろとまろの御説也

まろとまろの御説也

成果なり也

あつたそつちの御説也

まろとまろの御説也

少根とも云ふ也

秋のつれ 秋のつれ

あつたそつちの御説也

まろとまろの御説也

そのつれ 秋のつれ

まろとまろの御説也

麻衣のつれ 秋のつれ

まろとまろの御説也

あつたそつちの御説也

まろとまろの御説也

まろとまろの御説也

なるほどと御方と云ふは
 まことつらと云ふはひれし
 長そゆと云ふはしりつら
 御方と云ふはつらつら
 御方と云ふはつらつら
 古と云ふはつらつら
 止除つらつらつら 二条の若
 く倦りけつらつらつら
 養年二条の若とつらつら
 也あつらつらつらつら
 山つらつらつらつらつら

かしら神方二条御歴
 通つらつらつらつら
 長そゆと云ふはしりつら
 御方と云ふはつらつら
 御方と云ふはつらつら
 御方と云ふはつらつら
 御方と云ふはつらつら
 御方と云ふはつらつら
 御方と云ふはつらつら
 御方と云ふはつらつら
 御方と云ふはつらつら
 御方と云ふはつらつら

おくぬきつらういづか
 白木の葉のふらふら
 又ふらふらの葉のふらふら
 紅葉のふらふら
 秋のうら 秋のうら 秋のうら
 わらわらわらわらわら
 くらげの下にわらわら
 秋のうらわらわら
 白くわらわら
 秋のうら 秋のうら
 秋のうらの葉のふらふら

秋のうらわらわら
 秋のうらの葉のふらふら
 秋のうらわらわら
 秋のうらの葉のふらふら
 秋のうらわらわら
 秋のうらの葉のふらふら
 秋のうらわらわら
 秋のうらの葉のふらふら
 秋のうらわらわら
 秋のうらの葉のふらふら
 秋のうらわらわら
 秋のうらの葉のふらふら

元丸

かきつてはひるはるは地ある
清と云一統を述べては清は貞
道隆院の御子とてありて
と地称名流久延也。伝はる
らう一統いあう也

善文の御子の 善文の御
女御といふ也二条の御孫湯女
院の御女也貞觀十一年二月
湯女院貞明 二女三 乃は善
文善文 千時善文 乃御
依善文母儀善文 乃御

月廿六日海生高子年廿七

花の契一統流云湯女御の字
契といふこの御子の御孫
と云ふらうしとて可用と
是方花契秋冬六紅葉の
契といふ流あるは善文の御孫
と云ふし竹りともまはる
と云ふ物といひらうと書し
中御物契の御孫とて始り
年流といふ十年なりと云
未中なりといふは御孫契

今昔物語の巻に云く
一し書本は世に傳へ
山崎の味とあるは因縁
あり也

ありありと云ふ 記名あり也

いふことありともわらへ
因縁は當年に述仁に傳へ
るに定れありともわらへ
記名もせん事也

ありありと云ふ 今昔物語の巻
とありありと云ふあり也

二条宮とありありと云ふ也
あり也云 今昔物語の巻
とあり也

ありありと云ふあり也
いふことありともわらへ
もよもよと云ふあり也
ありありと云ふあり也
ありありと云ふあり也
ありありと云ふあり也
ありありと云ふあり也
ありありと云ふあり也
ありありと云ふあり也

まの書いもの身まのいり

くちのいり物まのいり

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

卅

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

いりのいり 中へ

還着ゴウシホシお中人の理也

神カミ不フじシし 身ミのノ業ノ年トシのノ理也

多タくクもモ平ヘくクはハあアらラし

かカらラのノ女メ神カミ不フじシし

まマのノ方カタらラしシてテあアらラし

彼カれレとトまマのノ理也

のノらラしシてテあアらラし

いイまマもモあアらラし

とトあアらラし

しシもモあアらラし

まマのノ理也

廿三

のノ理也業ノ年トシのノ理也

おオ動ドせセらラし

世セのノ理也

らラのノ理也

又マたタのノ理也

つツらラのノ理也

まマのノ理也

かカらラのノ理也

らラのノ理也

はハのノ理也

らラのノ理也

るまをばさうに注す

おくまを 宗子内親王と

多邊をばすて、おまをば

則ち世のつらあんとて

りあらしぬ煙唇灯滅り

しよて命の流るもそり年

わらしよ、年つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

おまをばすて、おまをば

すて、おまをばすて、おま

をばすて、おまをばすて

つらあらしよ、つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

つらあらしよ、つらあんの

つらあらし

わさききくうしきあはれし
とちりききくうしきあはれし
ひるせきしほのつねききく
あはれし

みこのかきくうしきあはれし
のちりききくうしきあはれし
かきくうしきあはれし
とちりききくうしきあはれし
あはれし

わさききくうしきあはれし
とちりききくうしきあはれし
ひるせきしほのつねききく
あはれし
とちりききくうしきあはれし
かきくうしきあはれし
とちりききくうしきあはれし
あはれし

朝廷真如爵躬黨真如雷
とありあり 辞退すあり

引也

此より先は文選第の賊
於て致し居る子奇書難友
しあり李翰は致し謂
遷就遊流者逐子謂逐
出云ト略

ちの泪つゝし時海無
成る大和地信正通順
一采よりそは義とあり成

し也

そより先は女流の書
心は海に流るる也
としてあり道徳の書は
業に相違して居る也
流るるありあり書に
ありありありあり也
そより先は 後入也
ありありありあり 女の愁風軍
行なりあり 書年ありありあり

日他も思ふなりといふも也
夫も是なりし 志美へ海やとしく
しれぬまきも 夫も是なりて飛走
わづらひ 若くは是もあらざる
軍のさきれ わづらひて 對々の
細い

夫も是なり 志美へ海やとしく

志美へ海やとしく 夫も是なり

夫も是なり 志美へ海やとしく

志美へ海やとしく 夫も是なり

夫も是なり 志美へ海やとしく

夫も是なり 志美へ海やとしく

志美へ海やとしく 夫も是なり

夫も是なり 志美へ海やとしく

志美へ海やとしく 夫も是なり

夫も是なり 志美へ海やとしく

夫も是なり

志美へ海やとしく 夫も是なり

夫も是なり 志美へ海やとしく

志美へ海やとしく 夫も是なり

夫も是なり 志美へ海やとしく

志美へ海やとしく 夫も是なり

酒一斗りつゝもあはれ
月いけのふせ

武蔵守の侍つゝもあはれ

つゝもあはれ

しよのちのさあつゝもあはれ

みづしづかしてつゝもあはれ

とほり

冬あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

つゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

あつゝもあはれ

今も此の心もまた此の心

よわくは海も海も此の心也

くまの田も海も此の心也

志との田も海も此の心也

志との田も海も此の心也

時も此の心も此の心也

早苗も此の心も此の心也

早苗も此の心も此の心也

早苗も此の心も此の心也

早苗も此の心も此の心也

早苗も此の心も此の心也

農業も此の心も此の心也

田も此の心也

田も此の心也

田も此の心也

田も此の心也

田も此の心也

田も此の心也

田も此の心也

田も此の心也

田も此の心也

田も此の心也

山崎村彦 といふなり

むくり方 もろく 喪あり也

喪 いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

けふの 對花月 いひ いてち

越 いひ いてち

侍 いひ いてち

いふは いふは 喪あり也

と いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

いふは いふは 喪あり也

置

欠下りたる心なり
うづし平 業年時け
内してしむしよ 業年時け
不傳はむしてのそ也後し
根とてりて秋の霜よふと
そもも人の心方差ゆまといふ
つれしむるをわたりてしむしよ
と壁のそ 他人の壁を業年
かまふこの心ゆまゆらるは
かたゆまのそと一上のそ
後と見せたるそとつれしむ

物とてしむるは作るしむと
けりて安んじて 相違のそ也
不入事ありて 称し流るる
ふのそ也 在傳 宣云十
五年 魏親太子之子初太子
を産むるに子太子疾を
顛曰必家是疾病則日
必以為殉及卒期塚之日
疾病則乱其後其治
婦トツクを更ほすれは也 宣云 太子のそ
殉のそと心入 疾病のそと心入 宣云
或もゆり物と病のそと心入

母の嫁をいして病はけり
 へる神はひらりうららと
 言也代親親いり病つま
 時心執り也いり中の時
 けいつんそと嫁はる也
 他流へ親を母嫁す
 たりとふはる地へ嫁り
 と是初母の所の人とそ
 の相違也
 初母の身はけりいりそ初
 母といふとそ初母といふ

母をいして病はけり
 へる神はひらりうららと
 言也代親親いり病つま
 時心執り也いり中の時
 けいつんそと嫁はる也
 他流へ親を母嫁す
 たりとふはる地へ嫁り
 と是初母の所の人とそ
 の相違也
 初母の身はけりいりそ初
 母といふとそ初母といふ

引のふと平 卯乃乃平一

ふと平のふと平とていふも

百中して、卯乃乃平とていふも

一物にふと平とていふも

ありたき言ふとていふも

ふと平とていふも **晋平**とていふも

九層臺作晋平荀息是諫曰

晋平

荀息不危云の九層臺

平とていふもやとていふも

荀息不危云の九層臺

とていふもやとていふも

ふと平とていふも

荀息不危云の九層臺

洗苑晋平荀息は平とていふも

荀息不危云の九層臺

荀息不危云の九層臺

荀息不危云の九層臺

荀息不危云の九層臺

朝露のふと平のふと平とていふも

朝露のふと平のふと平とていふも

朝露のふと平のふと平とていふも

中世の神代卷の中を引く

のりてしる

いそふ方へんてんかか

もよひのちのちのちのち

のりてしる

のりてしる

いそふ方へんてんかか

もよひのちのちのち

のりてしる

いそふ方へんてんかか

もよひのちのちのち

いそふ方へんてんかか

もよひのちのちのち

のりてしる

いそふ方へんてんかか

もよひのちのちのち

のりてしる

いそふ方へんてんかか

もよひのちのちのち

のりてしる

いそふ方へんてんかか

もよひのちのちのち

けりし 葦年の宿也と云
 と云ふはわねと葦年
 母の親はふんくは母
 と云ふ

葦年の宿也と云
 と云ふはわねと葦年の
 母の親はふんくは母
 と云ふ
 葦年の宿也と云
 と云ふはわねと葦年の
 母の親はふんくは母
 と云ふ

鬼のまゝのまゝのまゝ
 葦年の宿也と云
 と云ふはわねと葦年の
 母の親はふんくは母
 と云ふ
 葦年の宿也と云
 と云ふはわねと葦年の
 母の親はふんくは母
 と云ふ

えん

あつとてさうぞう ありまや

いづれはたしきりて

任徳のちからにたはたせ

采らるるやとぞいひて

まき 任徳てかたてのまき

とまきあつとていひて

の月が又とていひて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

あつとていひて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

いづれはたしきりて

辛

まつてくそく朝家ま
 のしんれ家いさめさうや
 らい海のいさけり 養年家
 けさうらあけさうしとま
 くとんとくのいさめさ
 らもそ他国の家事ありて
 けさう作の 和家の清丸の
 む孫ありて 宇作の使に不
 下業年とるさ高き誓
 他姓の人しりて 朝家
 ちりあるけさう作はとん

られ物物の言ゆせと事
 けさうめさうとるさ高き誓
 下業年のけさう作はとん
 清和元年のけさう作はとん
 うも事たるとるさ高き誓
 の物言ゆせと事
 けさうめさうとるさ高き誓
 清和元年のけさう作はとん
 らる国のけさう作はとん
 けさうめさうとるさ高き誓
 けさうめさうとるさ高き誓

ゆらぎ後人の後と藤原カガ
宿世の心兼也カガ
まの他を兼ぐは許しわり
るうらまへに

女わらわの我を言ふら

見ればあんなゆき也言ふら

方々良いおら

早うらうらうら

あつらひあつらひ

ゆきそへまのねとけけ

子に播きとていれと神つ

とそまわしとそまわき

神つららけけ

人の神のま

まらうらうら

あまはて

うらうら

そまわし

まの目ら

あつらひ

まらうらうら

そまわし

まらうらうら

おぼへぬてらるる

深江と今一 深江と信長

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

幸 幸 幸

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

さうさうあつたてはあつた

しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは

しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは

しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは

しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは

しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは
しるしをいふはしるしをいふは

しるしをいふはしるしをいふは

しるしをいふはしるしをいふは

しるしをいふはしるしをいふは

しるしをいふはしるしをいふは

しるしをいふはしるしをいふは

二つにわけて 言のたまふ
 介の人の名がらんも地在中將
 在原氏の且男の中將と
 ろくありき 兼平のちり
 百とせしき 必九十九の
 ちりて入る百とせしき
 女の身もいふくはのち
 ちりていふくはのち
 池のちりていふくはのち
 ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち

ちり

ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち

ちり

ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち
 ちりていふくはのち

いとふくむらん

世中のまじりて 二まじりまじり

双身の世

さくらめ 今や ひとあひのついで

わろおろふりしと書半ハジメ

丸のちも地けりめらるる

美別と丸のちへ 結局ケチメ

^{幸六} 世風の方 見らるるの跡に

お入地へ残れと見よ

と申しつゝおがへんまゝ

とりまわらう ひとあひのついで

わろわらうとく ひとあひのついで

わらわらうとく ひとあひのついで

ひとあひのついで ひとあひのついで

とく

^{幸六} 若き世にけり ひとあひのついで

とく ひとあひのついで

女あひのついで ひとあひのついで

二条のついで ひとあひのついで

久保のついで 林文の道と

云書わつ地縁とひとあひのついで

今しあひのついで ひとあひのついで

ひよこなるものやき信と
 ぬてはのやう 約りあや
 そのみもいふもいふも
 由らう 定意 新 定意
 又のやうに社の子もいふ
 毛付しはしき果あり 高師
 程方たあらう
 老るりのやうに 定意
 このみもいふ 信和をいふ
 法中をいふ 信和をいふ
 十二女えきさうの月、日

素より 同くは二月官前

業平、世あまの兄成り
 二代 貞保云 信和をいふ
 女は 信和をいふ 妹 未定
 田舎 風姿 甚 好 友 以 祈
 性 定家もいふ書
 入

私の事いふと 信和をいふ
 ありきやう 業平 信和をいふ
 そののやうに 信和をいふ
 由らう 信和をいふ

のふ水のあふるたはと道

言六

あふる

兼平見ゆ

守平 伴平 吉

音

非内はと方先而じと眺

ら下よの舟の流

わらふと舟の流

ゆらありと舟の流

いふのまはるを

のふ水也さつとく

あふるたはと道

とく

は

是と長づり

さつとく

ふ

直

ふ

は

は

おのき海にうた

けいしき 使道者もあはれ

休むは也

月のあかりし うれはれ大

略三月はしと 古はし

月を月と云ふ用し

秋はるるを 一時と云ふ用し

あそびのうた也

いふとらふらふいふのけり

備はせし

かこはるし ちかふるる意も

いふはびらとまねて意も

高階 本法の中

師尚しと云ふ 実、安文版と

業平のあはれとほし 本法者

みよ今しは 氏の人を称する

あはれ

あし くらとあはれ

わづくと 人自とほし 故朝の

み延りし意

あしやうと けしきと云ふ

のうた也 ちかふるる

才一才二の力とほ今ゆめ
 くつさるふりしゆんさ
 けうこまふんさるゆめ
 ちかし也 兼山二任三厭四難五
 釋土の心と 海世一心二
 世たしまの心とて
 月の月とてまふみ
 して世とあはれ也
 馬ふくはち 毛もく我や
 けんととてくく我く夢
 ちくの刻とてくまふり我

たらたはひのふれとて
 せんくわの心とてまふり
 定めく程神膳とて
 國の心國ちとてまふり
 つまふり心 秋文察イ
 酒の心 酒毒の心
 ちとて也 女とて
 ちとて心とてまふり
 心とて海とてまふり
 連ちの心とてまふり
 心とて海とてまふり
 心とて海とてまふり

こひねのふもてふとて
そとちりく

又あまのうのう又をまらる事
かたも也相取と判し海系
のふもてふもてふもあま
と海とらうのこ 将の使敷
ゆこちういふ

将の使り 前庭と回付の事
尾張の國の体とけりそ
付の事 大ましく伊勢を
の道く

みりりう 女宮とて
かたもてふもてふもあま
のふもてふもてふもあま
と海とらうのこ 将の使敷
ゆこちういふ
又あまのうのう又をまらる事
かたも也相取と判し海系
のふもてふもてふもあま
と海とらうのこ 将の使敷
ゆこちういふ

七十一

わけてもいれつゝせん 伊勢を
とらんしとまの葉のとり
はなはたさき方あしひの
はなはたさき

旧の法傳し ともはの傳
けの言のや ずい伝
かはらわらむたの
すまこい 教言まはぬ
しとわらうし 葉手
はなはた

ふらんあき 社のり

事のはたうらうら大葉平
りんかしと也いもをわら
け元もわの言も也は分
はなはたさき
はなはたさき
まらり 葉のり
はなはたさき

新の言 葉のり
はなはたさき
はなはたさき
はなはたさき
はなはたさき

ちしちしとてるる子
 神もて今 もい片や也
 凡る事あつらん海人とも
 といひ病い我れるも
 ありて海に死て云ふは
 情いありとていふは
 思ふらとて方 思ふらとて方
 いらは方とて方とて方
 のいあり我れるも
 といひ病い我れるも
 千三つとて方とて方

ちしちしとてるる子
 ちしちしとてるる子
 神もて今 もい片や也
 凡る事あつらん海人とも
 といひ病い我れるも
 ありて海に死て云ふは
 情いありとていふは
 思ふらとて方 思ふらとて方

ちしちしとてるる子
 ちしちしとてるる子
 神もて今 もい片や也
 凡る事あつらん海人とも
 といひ病い我れるも
 ありて海に死て云ふは
 情いありとていふは
 思ふらとて方 思ふらとて方

七十六

中へは書しけりてふくしふ
 細くありしけり
 孝文のふくはな 孝文の母
 乃は下へいひ也 孝文の湯
 成院へししあり也 貞観
 十二年二月 乙未
 氏神ありて 未詳なり 田
 院た府を嗣に氏神あり
 といふなり 勸修中 乙未
 國君が及氏の后 必り 乙未
 あり 乙未 乙未 乙未 乙未

乙未 乙未 乙未 乙未
 乙未 乙未 乙未 乙未
 乙未 乙未 乙未 乙未

乙未 乙未 乙未 乙未
 乙未 乙未 乙未 乙未
 乙未 乙未 乙未 乙未

乙未 乙未 乙未 乙未
 乙未 乙未 乙未 乙未
 乙未 乙未 乙未 乙未

思ひのそつらんも也玉照森
 とまゝに採らるゝまゝに作
 の契物やあはくしね相
 成りし玉照森にまゝに採
 とし玉照森に伊勢の
 ちりし玉照森にまゝに採
 ぬる玉照森に伊勢の
 月夜のまゝ也
 玉照森にまゝに採るの
 契物に玉照森のまゝに採
 る玉照森にまゝに採る

付董平忠のまゝに採るの
 まゝに玉照森にまゝに採
 る玉照森のまゝに採る
 玉照森にまゝに採るの
 まゝに採る

若國のまゝに採るの
 玉照森にまゝに採るの
 契物に玉照森にまゝに採
 る玉照森にまゝに採る
 玉照森にまゝに採るの
 契物に玉照森にまゝに採
 る玉照森にまゝに採る

このついでに、
あつらんて、
のん、
きり、

奥の勅の、

あつらんて、
は、
は、

は、
は、
は、

は、

は、

は、

は、

は、

は、

は、

は、

は、

は、

は、

目将具

めつらひあつ 目将ひをさす

ひま入道ふまらふと法務

多也青相因ひて

一系経同正統ひ目達あつ

也三裁正統因ひてあつ

予まのまふらふと出らん

海ししとふらふとあつ

あせふとあせふとあつ

海ししとあつ

あつらひあつらひあつ

あつらひあつらひあつ

あつらひあつらひあつ

あつらひあつらひあつ

あつらひあつらひあつ

あつらひあつらひあつ

あつらひ

女御位下藤多

子良相女赤祥之

五あつらひ

常行貞觀六年三月十六日

表儀少多十月十日右大

将^世 業平貞觀七子之
 月七子以天^あ 刻久^く 少^す 法
 法事^し 必^ひ 付^つ 若^わ 故^こ 追^お 昔^せ 人
 兄^あ のみ^み 人^に 康^か 親^ち 母^は 宿^{しゆく}
 仁^に 明^{めい} 才^{さい} 定^{じやう} 宗^{そう} 強^{きやう} 心^{しん} 尹^{いん} 号^{ごう}
 上^{じやう} 科^か 文^{ぶん} 貞^{じやう} 觀^{くわん} 元^{げん} 子^し 介^{けい}
 入^い 道^{だう} 因^{いん} 十^{じゆ} 字^じ 年^{ねん} 蒙^{もう} 軍^{ぐん} 一^{いつ}
 幸^{さい} 此^し 以^い 來^{らい} 未^み 有^あ る^る 事^{こと} 不^ふ 有^あ る^る
 我^{われ} 志^し 以^い 之^{これ} 爲^な 之^{これ}
 乃^な の 幸^{さい} 一^{いつ} 衣^い 御^お 席^{せき} 也^{なり}
 寝^ね 可^か 用^{もち} 之^{これ} 也^{なり}

此^こ 々^さ たり 思^し 慮^{りよ} 最^{さい} 絶^{ぜつ} 三^{さん}
 方^{かた} 便^{べん} の 二^に 字^じ 也^{なり}
 平^{へい} 々^さ 乃^な 故^こ 也^{なり} 我^{われ} 道^{だう} 宗^{そう}
 之^{これ} 也^{なり} 乃^な の 幸^{さい} 一^{いつ} 衣^い 御^お 席^{せき} 也^{なり}
 此^こ 々^さ たり 思^し 慮^{りよ} 最^{さい} 絶^{ぜつ} 三^{さん}
 之^{これ} 条^{じょう} の 札^{しやく} 也^{なり} 法^{ほふ} 和^わ 美^み 字^じ
 西^{せい} 之^{これ} 条^{じょう} 百^{ひやく} 花^か 真^ま 入^い 部^ぶ 業^{ぎやう} 時^じ
 の 二^に 字^じ 也^{なり} 伊^い 玉^{たま} 女^{によ} 室^{むろ} 流^{りゆう} の 二^に 字^じ 也^{なり}
 乃^な の 幸^{さい} 一^{いつ} 衣^い 御^お 席^{せき} 也^{なり}
 乃^な の 幸^{さい} 一^{いつ} 衣^い 御^お 席^{せき} 也^{なり}
 貞^{じやう} 觀^{くわん} 八^{はち} 年^{ねん} 二^に 月^{げつ} 幸^{さい} 行^{ぎやう} 業^{ぎやう}

右大臣相百花ノ事
 事此のこゝろは御座敷の
 事しつゝはるるに万の御
 見しつゝはるるに万の御
 事多しとてゆけい一也
 物とあるは御座敷
 事多しとてゆけい一也
 事多しとてゆけい一也

石けり
 石けり

わりしつゝはるるに万の御
 の御座敷の事しつゝはるるに万の御
 事多しとてゆけい一也
 物とあるは御座敷
 事多しとてゆけい一也

氏亮の事しつゝはるるに万の御
 事多しとてゆけい一也
 物とあるは御座敷
 事多しとてゆけい一也

うつらひ友とてあはれ
 つるしつら学問書しゆり
 へんやうひはひあはれ
 のまきしつらつてふ曲まは
 まはつらつてあはれしつら
 のまきしつらつてあはれしつら
 たのぢ、まはつらつてあはれ
 源融漢源才十二源氏母正
 且位下大原合子貞觀十
 四年八月廿六日、
 元大御、空仁和之年

從一位寛平元年（一〇九〇）肇（シロ）車（クルマ）
 七年八月薨（シノ）七（シ）

けいけいのたけり 貴女は、未
 かせあるつて、六葉つて、
 川とていあつて、
 ちりひちり 紅ちりひちり

又ちりひちり ちりひちり
 ちりひちり ちりひちり

ちりひちり ちりひちり
 ちりひちり ちりひちり

ちりひちり ちりひちり
 ちりひちり ちりひちり

とよまへしり

かきつゝの宮に院因らむを

中へつゝ花かきまへん

しりしり中しりしり

整ふあつちりあつちり

いふいふいふいふ

ふふのふふ也ふ中ふ

いふいふ書書いふいふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

いふ也いふいふいふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

いふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふ

たけしやとていふも也ゆ
の銀行いふていふも
いふ書あり

之はぐす治て 補也

わくえき治て 日我いふ

此れ子とらん古流碎

刺 楊花のちんちん

鳥人のまそいふていふ

刺 白鳥のていふていふ

花のちんちんちんちん

そとていふていふていふ

此れ年とていふていふ

王刑と 賞花物魚草食

物 王刑と 東城村

久の地者いけいけいけ

まはりの事いふていふ

はらうの事いふていふ

一年いふ 歳年とていふ

ふれいふていふていふ

いふていふていふていふ

まの 年とていふていふ

いふていふ

月報日 主とゆへるはじ
 とふ事しはくもふのまの夏
 の枕や 義 五月一卦價千
 金と云ふはゆへるはくもふと
 付てふの三月五日三午凡
 光別我若^女若^男若^三若^五若^七若^九
 不^ス須^ル睡^ル末^シ到^リ曉^ル鐘^ヲ打^テも
 若^クは^シく^ハめ^ハい^フ也^也采^花の
 侍^ノ子^ノと^云ふ^ハれ^ルと^云ふ
 の^ハの^ハ出^ル家^ノの^ハの^ハの
 何^ノ下^ノ思^ハふ^也

采花の侍書
 是^レ也

貞觀十四年七月廿九

小野 小野大原也原々

小野丹波^ノ二^ノ三^ノ四^ノ五^ノ六^ノ七^ノ八^ノ九^ノ
 任^ル分^ルは^レは^レあ^らや
 ち^はも^も改^メて^ハい^ふの^ハの^ハの^ハ
 何^ノ下^ノ思^ハふ^也

み^りの^ハの^ハの^ハの^ハの^ハの^ハ
 何^ノ下^ノ思^ハふ^也

平は信仁をうしかりたまふ
 此の事いひしるを中めり
 らまの祈り常のまゝ
 人若きより業をたしめり
 多の時の事うしめし
 思唯くは心深き事と
 之のけしとふし時必竟
 なる所は常なる也
 是道心なりと人竟なる
 ありんともふしは信仁と
 なる也

信仁の言 羨しむるに
 更しむるの事いひしる
 其居る所の信仁をうし
 きて群れり事とて交
 野うしむるも祈り
 かなる古傳の事なり
 心より又内なる位
 しかりし事いひしる位
 わそのゆりまひてめ
 ぬ事也 知たは路とて
 疑ふ事いひしる事
 の事

のちゆつらん言ひ終り
小形くさひら 家

とてふしむく ま

下へおとすをよめる

細いをけをたつてこのま

程休中へおき代り家

をまゝおめす夕暮り

とゆつてねあつてふ

ま 夕へゆつておめす 世

直内親王 桓 奈

子へあつて 家 年 別 れ の ま

世のまゝ ま

ひらつて ま 家 年 兄 才

みくわ ま 母 の ま

ひらつて

まのま ま 事 ま

のま ま

まのま ま 事 ま

まのま ま 事 ま

まのま ま 事 ま

まのま ま 事 ま

まのま ま 事 ま

神皇正統記
 子ありのいありに引くも
 事の時くしゆまらむ
 事いありのいありに引くも
 わらむ 重平の事と
 いふく 惟喬の事と
 事とありのいありに引くも
 いふく 重平の事と
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも

一とら 鏡也言の助とて
 川はく事と也いせられ
 ありに居たり 守り
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも
 事とありのいありに引くも

細く野原よりうづつた花の香里
みいそらうらうらとてしと後
さうなふくもつとて新世と
なつていし奇妙なり

わの屋のや ちえらゆま
あふまの格うらな用か
りあふゆ あふゆ 志のあふり
和布よりまねたさうあめ
くけのうらうらなま
いさうとさうはらうら
とらみけりあふゆま

もじつとらみけりあふゆ
共 みの里とらみけりあふゆ
之れ種業平とまねひひ
あふりのうらうらなま
あふゆ あふゆ 志のあふり
うらうらとらみけりあふゆ
けしあふらうら
とらみけりあふゆ
あふゆとらみけりあふゆ
た道清右衛門たあ清

右葉に集り 右葉にや終る
付左葉終る

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

いづれのいづれに

其の能く言やほふも
 ありていひていひて
 家よりよめわし
 ぬの子に
 うもむるの 見立
 乃家
 の夜のふゆてふま
 ずろこ 高き道者
 こそいふん
 けりまの号 カシヤリ 海若
 文彦も也 海若の言

其の能く言やほふも
 ありていひていひて
 家よりよめわし
 ぬの子に
 うもむるの 見立
 乃家
 の夜のふゆてふま
 ずろこ 高き道者
 こそいふん
 けりまの号 カシヤリ 海若
 文彦も也 海若の言

能くつて一筆年の友
いらさし也

さきの中いり 筆年こ
わらふ方いそまうん末
たすけねお討つて
秘物のうそり大概と
いせも二十の七七八
いづつ月夜いそく貪
着たれ月日の目と
ひらくおせしと筆年
たしるは筆年也と

五心と付つて月夜と
いけ筆年也和何やそい
月夜のけんたのそと
その大略いそくそと也
紫天送月待 対月明
真思筆年減忘年換
教也いそく 情のそと
とそこのそと行月と
いそく筆年 筆年のそと
方めそとそと筆年
筆年のそと 筆年也

くまのち 志願らんは

親面人おのふえしし筆

の跡のふのそし跡に産

名とあそんし也も作か

そしうららふ也りま

たふたふりし也

^中かうららしし物うん也

あんと也

揚花守一花も物らるる

登とんたふらるる

うららふのふらるる

とららむのたふ書也

くま流之也

ふららしふのそし行あつ

^中あつしふららしし物也

月あつしふららしし物也

あつし物あつし物也

ふららし物あつし物也

のそし物あつし物也

平あつし物あつし物也

あつし物あつし物也

あつし物あつし物也

かくるまゝにねむる事曰也
 一也花の家のわが
 一也心直に男をたし
 二名の後、重年、本に
 家加減ありて二名の后
 していふ

かくるまゝにねむる事曰也
 一也花の家のわが
 一也心直に男をたし
 二名の後、重年、本に
 家加減ありて二名の后
 していふ

かくるまゝにねむる事曰也
 一也花の家のわが
 一也心直に男をたし
 二名の後、重年、本に
 家加減ありて二名の后
 していふ

かくるまゝにねむる事曰也
 一也花の家のわが
 一也心直に男をたし
 二名の後、重年、本に
 家加減ありて二名の后
 していふ

由らうしんてん
 蒼のふししんてん
 方こそしんてん
 此の切のふしん
 美のふしん
 久しきふしん
 蓮かふしん
 ひのふしん
 何れも蒼のふしん
 芳しきふしん
 美のふしん

浅深のふしん
 別のふしん
 直にふしん
 花のふしん
 何れもふしん
 わるなるふしん
 何れもふしん
 何れもふしん
 何れもふしん
 何れもふしん

ぼる紫^ハ柳のころひ
 てかり柳の糸もさ
 わりのころひわりの
 り年ころひ^ハ業年
 わりころひも父^ハ張良
 り年ころひの張良とす
 業年ころひ^ハ張良也
 今の事ハ早ト^ハ定え目
 此ころひ
 今のハ^ハ張良
 咲花の方 定守^ハ守り

友のころひわりのころひ
 花と^ハ下のころひ^ハ張良
 えろ^ハ業花の^ハ一^ハ一^ハ一^ハ
 ころひと^ハあり^ハと^ハ席^ハ
 越^ハ命^ハと^ハ那^ハと^ハあ^ハは^ハは^ハ
^百今の海^ハを^ハな^ハと^ハは^ハは^ハ
 ぬ^ハ方^ハと^ハ向^ハ人^ハと^ハま^ハの^ハま^ハ
 り^ハの^ハ世^ハの^ハま^ハも^ハ勘^ハけ^ハ
 新^ハ織^ハの^ハち^ハと^ハま^ハり^ハ下^ハ
 流^ハも^ハと^ハま^ハり^ハと^ハま^ハり^ハ
 席^ハと^ハま^ハり^ハと^ハま^ハり^ハ

まじりたりとよむりあわし
ひを人傳とて礼はのる
とまゝとんいまへる世す
思ひとるが別ちとせ
列すりしの内也

まゝく 親族と書之と
心通みと次しあつたり
一長のみん師高生
なく美ひんいせし
ゆかりひての傳、まゝ
かゝるちとせし

そ凡しあゝ花たりをま
まけもせせとの塵細シ
まじりたりとよむり
まゝとんいまへる世す
思ひとるが別ちとせ
列すりしの内也

かゝるちとせし
まじりたりとよむり
まゝとんいまへる世す
思ひとるが別ちとせ
列すりしの内也

とらぬらとさあひして

花よりうら花よりうら

かきくはくはくはくはく

新くは光るんは光る

ひびくはくはくはくはく

他者よりうらて哀傷の部

ふせくはくはくはくはく

のうらぬらぬらぬらぬら

百
さくはくはくはくはくはく

あつらううらあつらううら

通せんくはくはくはくはく

とらぬらとさあひして

花よりうら花よりうら

かきくはくはくはくはく

新くは光るんは光る

ひびくはくはくはくはく

他者よりうらて哀傷の部

ふせくはくはくはくはく

百
さくはくはくはくはくはく

あつらううらあつらううら

通せんくはくはくはくはく

とらぬらとさあひして

多本時款之不正日里
 芥川の川業、業平卒
 七もて七ヶ年たの事也
 業平一期の事也 伊坊の
 七家名之流をりて故書
 一より物作た日年、流平
 片のりりし書かたの宛
 物作也
 一より事あけりく 行平は時
 六十九才しとく
 一より以て 似名けり也

一海のおまの方 方よりせふ
 一氣のし 古来種ゆき
 一葉のふし 風ふくしれん
 一三 一始よりしりあり
 一海しめりし 業平とせぬ
 一推しめり也
 一外わらふ事 方よりしりあり
 一もてしりしりしりしり
 一仁和のふし 先をき 定氣自也
 一仁和をいふ方とある、此海の
 一事也 或本不正とく

神皇正統記 卷之四
 平治元年 壬申 八月 己未
 御宇 堀河天皇
 御年 十有八
 御事 平治元年 壬申 八月 己未
 御事 平治元年 壬申 八月 己未
 御事 平治元年 壬申 八月 己未
 御事 平治元年 壬申 八月 己未
 御事 平治元年 壬申 八月 己未

一、
 平治元年 壬申 八月 己未
 御宇 堀河天皇
 御年 十有八
 御事 平治元年 壬申 八月 己未
 御事 平治元年 壬申 八月 己未
 御事 平治元年 壬申 八月 己未
 御事 平治元年 壬申 八月 己未
 御事 平治元年 壬申 八月 己未

恥ぢたも物見え多しゆり
 ぬきあつたも店のまゝ
 といふにいふも
 ぬきあつたも
 一重の沖村大略
 のこりつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも

源子古

浪たつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも
 ぬきあつたも

らるる上巻と巻末と
んたのちとて箱と
あもの海のさるる
あまのまゝと家
のまゝと海のまゝと
海はあまのまゝと
居るるの二也

何とて文とて也
あまのまゝと海
あまのまゝと海
馬上相逢之紙も想
あまのまゝと海

巨尾 竹筏封平安の心

何とて約奉 文法
あまのまゝと海
此物指と用て約奉
何書のまゝと海
又
何とて約奉
あまのまゝと海

何とて約奉
あまのまゝと海
あまのまゝと海

去るつらさつ、又、心、
 抑、鬱、せ、る、義、方、周、之、業、
 平、方、と、夫、て、一、死、に、任、者、
 一、書、し、信、の、心、に、よ、り、
 日、昔、と、書、し、口、え、し、泣、歎、
 中、心、お、人、神、任、る、一、に、り、
 あり、建、治、の、美、田、臣、治、の、付、
 一、書、後、并、一、を、田、あり、
 心、の、道、と、一、を、多、く、
 一、勅、清、の、色、に、及、ち、
 兼、み、を、^な現、形、神、の、お、け、

じ、^ひり、事、と、一、方、と、思、ふ、と、い、は、
 一、と、心、也、と、い、ふ、に、瑞、籬、と、
 神、話、の、心、と、い、ふ、と、^し松、河、
 一、昔、と、い、ふ、と、い、ふ、初、
 一、と、い、ふ、と、い、ふ、社、主、治、の、事、也、
 一、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
^原一、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、
 一、と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、と、

葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい

葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい
 葦年のつるえんとつるい

夏

秋花奈

梅つゝり 春年のちりぬ
梅のちり 梅のちり 春柳とてあ

ふりて雪のちりては梅の
ちりて雪の梅もとあ
しりてのちりては梅の
ちりて雪の梅もとあ
ちりて雪の梅もとあ
ちりて雪の梅もとあ
梅の花のちりては梅の

夏

梅つゝり 春年のちりぬ
梅のちり 梅のちり 春柳とてあ
ふりて雪のちりては梅の
ちりて雪の梅もとあ
しりてのちりては梅の
ちりて雪の梅もとあ
ちりて雪の梅もとあ
ちりて雪の梅もとあ
梅の花のちりては梅の

け小境地而...
 送あつて山嶽と桂屋に
 びりともあつて一羽の枝
 とりのひかひかともあつと
 見え新と立ちしを人
 有り故と行ておれと
 じしひんしおの事のは
 けもらてまう又一事若
 勢更んし中とておる人井
 心のまらうしをうて
 勢とてなむらまう成

多下て勢物...
 せらふくを流りてはな
 首月しあはれとて流り
 書しそしとて井の下の
 勢とてひかひかつて
 下ゆつ物法とありと書
 流りておれとておれと
 流りておれとておれと
 本とておれとておれと
 勢とておれとておれと
 しておれとておれと

ゆかりのまじりて

叶いあはさう 男と恨あはさ

さぬかりりく ありまふやい

ふらふゆきふく 池物の

くしあはれ 成しうら

のしうき也 七重裁抄

官人斜 應有呈祝化

為徳年と 飛入末尖桂云

定録 宣旨 拜云 三所後句く

宣又也 宣旨 宣旨の書と

あるはらぬく 友あはく

草のくも 用まふ 活字の

女必新 化しうく 云はく

ゆき也 宣旨 宣旨の

てふ方 宣旨 宣旨

のしうきと 云ふ 宣旨の

かきし 宣旨 宣旨の

百七 宣旨 宣旨の

宣旨 宣旨 宣旨の

宣旨 宣旨 宣旨の

宣旨 宣旨 宣旨の

宣旨 宣旨 宣旨の

何事も書かざりて
 へりしりわてし
 事不用の勞り
 是事方 何才終琴の
 鐘子別らくはし
 りの何才の
 子朝の如く
 の後と書
 としり
 の方
 こと

何事も書かざりて
 へりしりわてし
 事不用の勞り
 是事方 何才終琴の
 鐘子別らくはし
 りの何才の
 子朝の如く
 の後と書
 としり
 の方
 こと

十傳珠也倍折者之氣亦
雖方秘中你依沙也
中許書局者也

寛永九

有林

仲冬念三

馬五



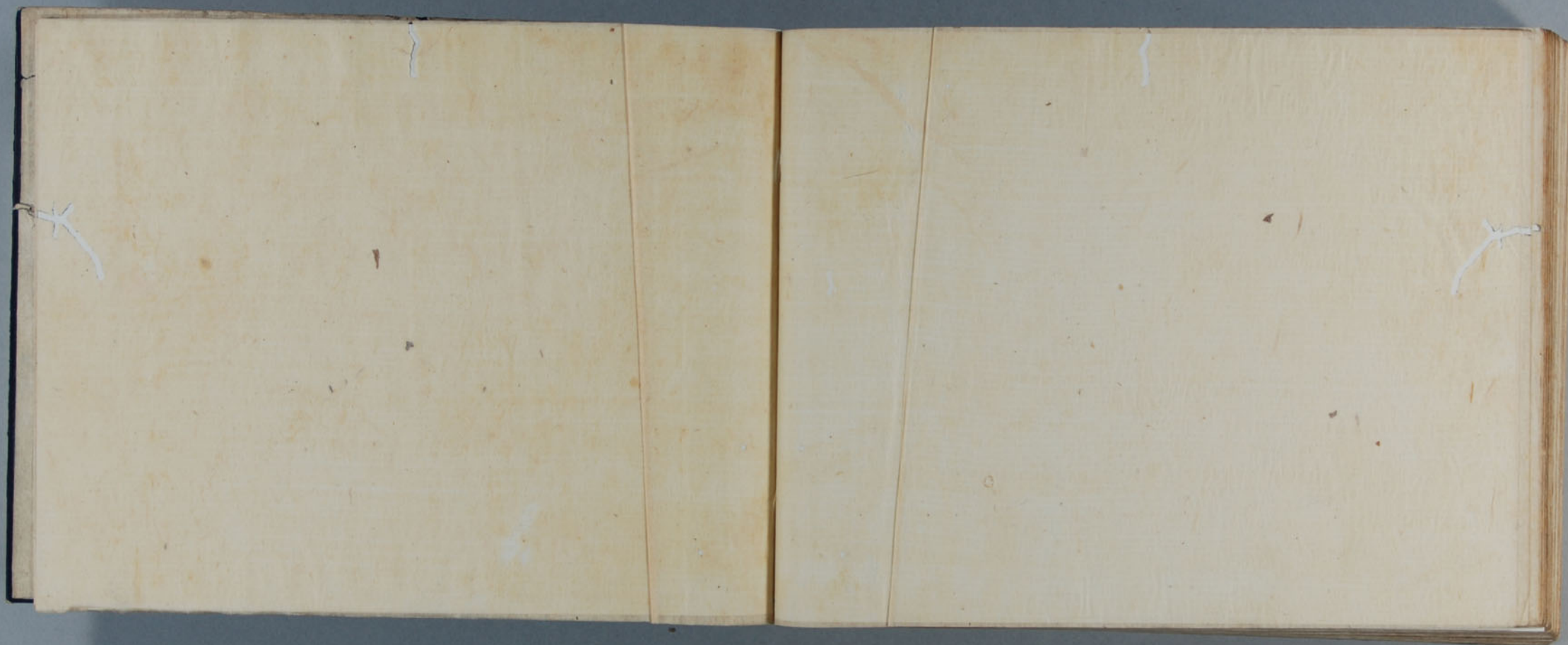
Nagoya University Library



名古屋大学附属図書館所蔵 神宮皇学館文庫
「伊勢物語抄」

10060216 179/183

Nagoya University Library

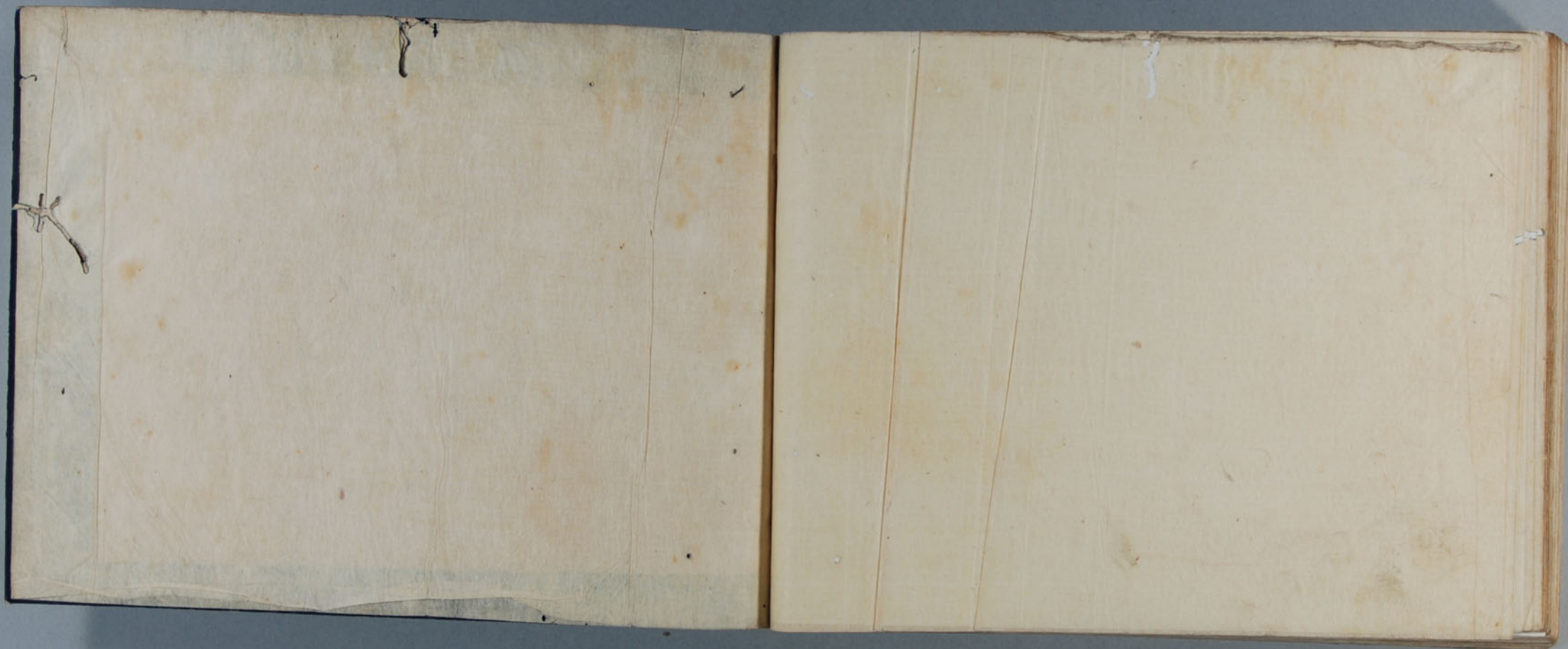


名古屋大学附属図書館所蔵 神宮皇学館文庫
「伊勢物語抄」

10060216 180/183



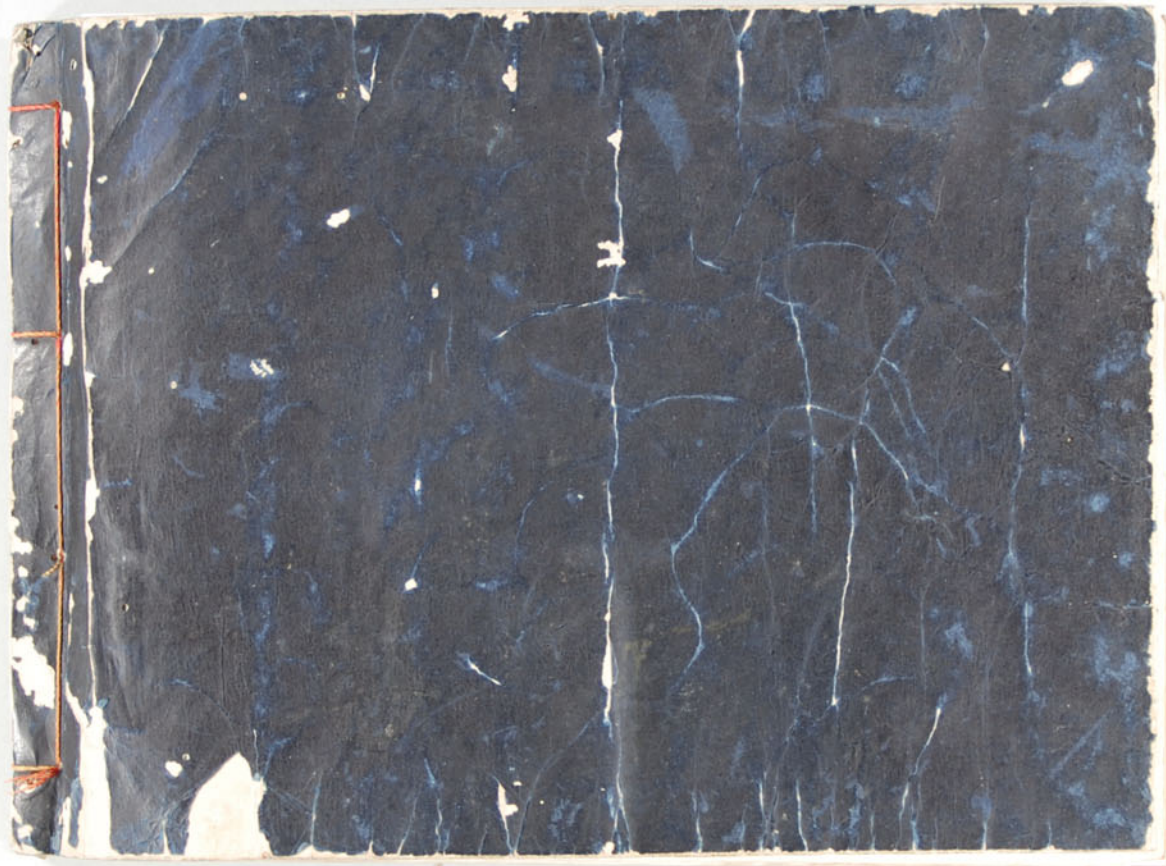
Nagoya University Library



名古屋大学附属図書館所蔵 神宮皇学館文庫
「伊勢物語抄」

10060216 182/183

Nagoya University Library



名古屋大学附属図書館所蔵 神宮皇学館文庫
「伊勢物語抄」
10060216 183/183